
D計画達成

御餅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D計画達成

【Nコード】

N9979N

【作者名】

御餅

【あらすじ】

昔妄想したのを書いた奴です。

(前書き)

キラの死 Ⅱ 議長勝利 END

「こんな……！これは！？」

インパルスに一方的に追い込まれ、キラは焦りの声を上げた。しゃにむに向かってくる機体から放散されるように、凄まじい殺気が伝わってくる。キラは胸が苦しいような圧迫感をおぼえた。

息つく間もなく浴びせかけられるビームは、まるでキラが回避する先を読むかのように機体に吸いついてくる。

シールドの陰から撃ち返そうとしたとき、その一発がライフルをたたき落とした。ライフルが爆散し、地に落ちる。

ミネルバから剣を帯びたモジュールが射出され、インパルスはそこから剣をつかみ取った。

その際にアークエンジェルへ追いつこうとしたキラは、インパルスの投げたビームブーメランに気付きシールドを向ける。

フリーダムはかろうじてかろうじて受け止めたが、機体は大きくバランスを崩した。

そのときミネルバの艦首から白い光が迸った。あの光は、陽電子砲の光だ。

そのまばゆい光条が海中に姿を消そうとしていたアークエンジェルに襲いかかる。

「……！！」

キラが母艦に気をとられた、わずか一瞬のことだった。

目を戻したとたん、モニターに長身を振りかぶるインパルスが大写しになる。

とっさにシールドを上げる。

—— いけない……！

キラは目を見開き、自分の上に振り下ろされるレーザー刃を見つめた。その光刃から迸る痛いほどの殺気。

体制を戻し、スラスターを逆噴射する。だが、相手の突進の勢いが勝っている。

突っ込んでくる刃が盾を貫き、一気に装甲越しに腹部を貫いた。

凄まじい衝撃のあと、コックピットに響いていた警告音が轟音に飲み込まれる。

視界がブラックアウトして、彼の意識は暗闇に運び去られた。

C・E・74

メサイア内部——

「そうか、報告ありがとう」

「ハッ」

宇宙要塞メサイアのなかで椅子に深々と座るその男の名は、ギルバート・デュランダル。

今、この世界の支配者である男だ。

ロゴスを世界の真の敵として、その討伐を果たし、デスティニープランによって遂に世界統一を果たしたのだ。

突然、一つのビジョンが浮かび上がり、一人のザフト兵が映った。

『御報告に上がりました』

「どうした？」

『議長、Aエリアに武装勢力が現れました。武装していてどうやらこちらと交戦する気のようにです』

デュランダルはふと顎に手を当て、僅かに思案する素振りを見せて、ザフト兵にこう言った。

「ロゴスの残党かね」

その言葉を口にしたデュランダルは、自らの言葉に苦笑した。

ロゴスではないことはわかり切っている。既に壊滅した上でジブリールの意味を受け継ぐ者などいやしない。

何故なら、連合は先日既に壊滅し、戦力もなくこちらと一戦交える足掛かりすらないのだ。

しかし、ビジョンの向こうのザフト兵は強張った顔になった。

当然だ。未だにロゴスは世界の敵であり、絶対に許してはならない存在だからだ。

全く、わかりやすい悪がいてくれるとこちらが行動しやすい、ロゴスには感謝しないとな、と彼は苦笑した。

デュランダルはそのザフト兵の顔を見て、ふっと笑い、こう言った。

「ならばこちらから援軍としてミネルバとシン・アスカを向かわせよう」

この言葉に、ザフト兵は驚いたような顔になった。

「よろしいのですか？特務隊の者をお借りしても」

「私の直属だ。私が許可を出しているのだから遠慮することはない。剣は使ってなんぼなのだからな」

シン・アスカの事を普通に“剣”と言い切った彼はこうも続けた。

「彼とて、自身の役割を果たせるのだ、これ以上の幸せもないだろう」

デュランダルという言葉聞いたザフト兵は、敬意に満ちた表情となつて姿勢を正した。

「わかりました、ではミネルバと合流し次第、掃討を開始致します」
「頼むよ。テロリストが相手である以上、捕虜の事は考えなくてもよい。徹底してくれたまえ」
「はっ！」

ザフト兵が敬礼をして、直後に画面も消えた。

シン・アスカの名前を出したデュランダルは、ふと脳裏に自分の事をギルと呼んで慕つてた一人の少年を思い浮かべる。

その少年、レイは自分の死を持ってシンをデステイニー・プランの呪縛に縛ることに成功させた。

そう遠くない未来にレイを失う事を知っていたデュランダルは対して思い入れもなかった。彼もまた、手駒の一つだ。

それに、あのシンが戦友の最期の頼みを無下にするような男ではない事は承知している。

あとは、自分がシンを使いこなすだけの事だ。

あの男は自分の意思で動いているように思っているかもしれないが、インパルスを与えた時からずっと、自分の掌の上だ。

それを自覚しないからこそ、駒としての活躍が見込めるわけだが。それからすぐに要塞メサイアから灰色の戦艦が飛び出していくのを見たデュランダルは、呆れたように息をついた。

——全く。この期に及んで、まだ私に戦いを挑むつもりなのか。彼らは。

実際、あれはロゴスではない。恐らくクライン派の残党の者だ。既に勝機などありはしないというのに……この行動は、焦っているのだろうか。だとするともう彼らには余裕がないのか。

デステイニープランを実施してからデュランダルが最も力を入れているのがクライン派の残党狩りだ。

別に脅威に感じているわけではない。目障りだから排除したいまでだ。

何故なら、あちらにはもうラクス・クラインがいないのだから。

彼女がもう少し厄介な敵になるかと思っただから、存外に大したことはなかったことには多少の落胆を覚えた。

所詮、彼女も人間だという事だ。当たり前の事だが。

残党共も、いつその事レクイエムで抹殺してしまおうかと考えたが、それは非効率だ。対象が余りに小さい。

デュランダルは、部屋の天井を見た。

アーモリーワンでのMS強奪事件から始まり、ユニウスセブン落下事件、そして宣戦布告と開戦、核ミサイル――

更にロドニアの発見とベルリンの侵攻、その直後のロゴスへの宣戦布告、そしてデステイニープランの実行――

道のりは長かったが、ここまでの事が自分の筋書き通りとはいえ、余りにもスムーズに行き過ぎて退屈なくらいだった。

一番の懸念材料だったオーブ侵攻戦は思いの外あっさり終わった。

セイラン家のまずい指揮によって一気に前線は崩壊し、新型機で飛び出してきたカガリ・ユラ・アスハはシンが討ち取った。

そのまま逃げ延びていたアークエンジェルを捕え、クルーは拘束し、逃亡したアスランとメイリンは処刑した。

そのあと孤立したラクス・クラインを捕えるのはそれほど骨ではなかった。勿論極秘だが。

――まあ、無理もない。“彼”はもういないのだから。

あとはもうジブリールを泳がせ、勝手に踊らせておけば、あの男は破滅する。

そしてその直後、大きく混乱した世界が立て直す前にデスティニープランを導入した。

デュランダルにとつて、最初のアーモリーワンの事件の時からこの世界は我が手にあったようなものだった。

——いや、違うな。

そうだ、正確には“彼”が退場した時からか。

今、正直に言わせて貰うと、シンで“彼”を倒せるか相当怪しかったのだが、レイの作戦もあり、どうにか成せた。

思えば、オーブ攻略戦があれ程手応えが無かったのは“彼”がいなかったからに他ならない。

いや、そもそも“彼”がいなければ——

アークエンジェルがヘリオポリスから出ることすらできなかっただろう。

前大戦、オーブは一度も持ちこたえることなく陥落するだろう。

ラウを倒すことなどできなかっただろう。最悪地球が滅亡していたかもしれない。他のメンツでラウに勝てたとは思えない。

そして、もし“彼”がまだ存在していれば——

少なくともオーブ攻略戦があそこまであっさり雌雄が付くこともないだろう。もしかすると敗退も考えられたかもしれない。

“彼”なら、確実に私のプランに反対してくるだろう。最悪、こちらの——私の敗北も有り得たかもしれない。

故に、エンジェル・ダウン作戦が成功した時、最も喜んだのは間違いない自分だろう。

シンやレイもよくやってくれたと思うが、重要なのは結果なのだ。ラクス・クラインも“彼”がいなければそこまで脅威ではない。

そもそも、オーブやクライン派は“彼”に頼り過ぎな面があった。
“彼”なしでは正規軍であるザフトには全く敵わない。

それどころかクライン派は表舞台に出ることもできない水面下の組織で終わりになるだろう。

こちらがちよつと本気を出せば簡単に捻り潰せる、その程度のもんだ。

実際、“彼”抜き奴らは本当に弱かった。不安要素だと思っていた自分がバカらしくなってくるほどだった。

そうだ。こちらにはシン・アスカやアスラン・ザラの代わりになる戦士などいくらでもいる。

しかし向こうには“彼”の代わりになる戦士などいない。いや、世界のどこを探してもいやしないだろう。

しばらくして、敵の殲滅の報告があった。

デュランダルはそれを聞いて、満足そうに笑った。

通信を切った彼は、小さく、しかし力強く宣言した。最も厄介だった宿敵に対して。

「私の勝ちだな……キラ・ヤマト！」

C・E・74

ロコス狩りを終えた現プラント最高評議会議長の導入したデステイニープランによって、世界は統一された。

その内容とは遺伝子によってその人の生き方を決めてしまうという内容であった。

導入宣言直後にザフトはアルザツヘル基地とオーブにレクイエムを放ち、レクイエムの存在を世界に知らしめた。

プラン導入を反対していた各国もレクイエムの威力に震え上がり、プラントの傘下になった。

その日から、世界中の人間が自らの遺伝子によって決められた人生

を歩むようになった。遺伝子が王になり、絶対者となった。
人々は、永遠に“自由”を手にすることができなくなったのだ。
そう――

――人類が夢を見る時代は、終わったのだ。

（後書き）

キラ「すごい書いたなあ……作者は」

御餅「いやあ、実は34話で君が死んでいたらどうなってたか書いてみたんだよ」

キ「うーん……違うと言い切れないなあ……」

餅「だってオーブ側は常に後手に回ってたじゃないか。それに国力も違う。」

君がいたからAAだってあそこまで伝説的存在と見なされたんだよ。後手に回るには強力な反撃能力がないと」

キ「それが僕なのか……」

餅「それに君がいなかったらオーブでカガリがシンに殺されてオーブ詰みじゃん。メサイア戦もなく終わるね」

シン「それにしても、俺を剣、かあ」

餅「シンに関して言うなら、レイに抱きこまれていた状態だからな。少なくともフリーダムを討ったシンが議長と敵対する展開がどうやって思いつかんかった。」

スパロボみたいに別作品の奴やオリキャラでも出さん限りその展開は不可能だ。寧ろこの方が自然だった感じすらあるな」

キ「できなかつたの？」

餅「だってシンには多くの人を纏めるだけの人望もカリスマもない、財力も政治力もない、そしてそういう知り合いもない。」

兵隊としての能力が高いたけの一平卒だ。勿論これはアスランやキラ、ムウなんかに言える」

シ「確かに俺には後ろ盾になる組織がザフトを除けば何もないな……」

餅「そこは別にシンが悪いわけじゃない。そもそも議長が目に着けたのはその能力のおかげだからな。」

話は変わるが、キラを討った後の君は打倒ロゴスに燃えてただ

ろつ。その後D計画を出されても、

レイのカミングアウトで君は議長に敵対できなくなる。君は死に逝く戦友の遺言を断れるキャラじゃないだろ？」

シ「当たり前だ！」

餅「よって敵対は不可能。そもそも議長の掌で踊ってなかったのはキラとラクスクらいだったからな。

更に言うならラクスがいても、さっきも言った通り強力な反撃能力が無いと表舞台にも出れないんだよ。

クライン派ってオーブと結託してるとは言え、キラがいないとすごく弱小組織だし」

キ・シ「……」

餅「レクイエムがあるから、表立って反発できる国もなく、それ以前にロゴス狩りで経済に大打撃を受けている状態だしな。

D計画には逆らえない。……とまあこれが議長のシナリオだったんだろつね」

キ「何というか……すごいね」

餅「それにシンは抱き込めてるし、アスランは簡単に懐柔できる、ラクスは面倒だけど大きく出遅れた。

つまりあれだよ、議長にとってキラさえどうにかすれば問題なかったんだよ」

キ「じゃあ今回のつて……」

餅「そうだ。議長勝利エンド達成の為に君に死んでもらう事になった。というわけで死んでもらったらあら不思議、

寧ろオーブ側が勝つエンドの方が思いつけなくなったよ」

キ「ひ、酷い……」

シ「……俺は？」

餅「見ての通りだ。議長の部下Aさ」

キラを殺すとオーブ戦で詰むよね。いやあ書いてて楽しかった。因みにこんなのを書いてる私ですがSEEDもキラもシンもすごく

大好きです。

アンチでも何でもありませんよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9979n/>

D計画達成

2011年10月7日23時38分発行